

何事によらず、だろうが。

溜める過程では、何らかの苦勞を伴うことになると思っている。

たとえば知識の習得。

遠い昔、中間試験や期末試験の前夜に励んだ一夜漬けも、思えば知識の習得だった。

眠気覚ましのため真冬の深夜、寝静まった町をひたすら走った。部屋に戻ったあとは、机の脇に置いた電気ストーブを点す<sup>とも</sup>。

凍てついた部屋を暖めるには遠い、小型ストーブだ。が、駆けた身体には心地よかった。

暖かさは猛烈な力で眠気をおびき出す。

眠気覚ましどころか居眠りを始めてしまい、ついには熟睡した。

試験前夜の知識習得は難儀だった。

しかし丸暗記の知識を使い、全問を埋めたときには、身体の芯を快感が走り抜けた。溜めるは苦勞だが、使うのは快樂である。

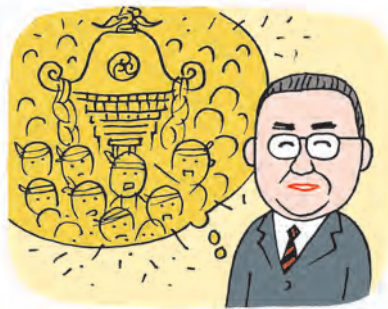
深川富岡八幡宮の本祭りは三年に一度だ。

「なぜ毎年ではなく、三年に一度ですか？」  
問いへの長老の答えがふるっていた。

「本祭りに遣うカネが貯まるには三年かかる」  
毎年本祭りを催しては、カネがもたないというのが、長老の説明だった。

真偽はともかく、深く得心させられた。

富岡八幡宮本祭りの歴史は古い。



絵・江口修平

## 遣う快感も

山本一力

元禄時代の豪商・紀伊国屋文左衛門(紀文)は、京橋材木町(当時)から深川に店を移した。材木の水運には深川が便利だったからだ。

ひとのところが読める紀文である。移り住んで間もなく、土地の者がいかに富岡八幡宮を大事にしているかを察した。

「費えは問わない。次の本祭りまでに、なんとしても間に合わせるように」

紀文は総金張りの神輿三基を富岡八幡宮に寄進した。のみならず、担ぎ手千人分の半纏<sup>はんてん</sup>と、高価な縮緬<sup>ちぢみ</sup>ふんどし<sup>あぶら</sup>まで誂<sup>あつ</sup>えた。

土地の者が本祭りに向けてカネを貯め、すべてを遣いきるといふ気性を見抜いての寄進だ。

他所では「成り上りの豪商」と言われて、紀文の評判は芳しくなかった。が、深川では紀文の人氣は図抜けて高かった。

カネを貯めるには日々の費えを切り詰めて、つましい暮らしを続ける苦勞がある。

本祭りでは貯めたカネを一気に遣うという快感を、だれもが等しく味わった。

貯めるは苦勞だが遣うは快樂。  
明日に備えて貯めるは大事だが、遣ってこそのカネだ。そのときに臨めば惜しむな

かれ。

やまもと・いちりき ●昭和23(1948)年、高知県に生まれる。昭和41年、都立世田谷工業高等学校電子科を卒業。会社員を経て平成9年、『蒼龍』で第77回オール讀物新人賞を受賞。平成12年に初の単行本『損料屋喜八郎始末控え』を上梓。平成14年には『あかね空』で第126回直木賞を受賞。その他の著書に『だいこん』『峠越え』『辰巳八景』『ジョン・マン(波濤編・大洋編・望郷編)』などがある。最新刊は『つばき』(光文社刊)。東京都江東区在住。

